豪雨の記憶後世へ「繋」を読んで

岡山市・就実小５年　東郷　福太郎

ぼくの誕生日は、八月二日です。しかし、誕生会をした事がありません。三年前の西日本豪雨の災害をニュースで見ました。人事の様に思っていた災害がぼくの住んでいる倉敷の真備町で起きたのです。「晴れの国岡山がなぜ？」屋根の上から助けを求める人々の姿をこの目で間近に見ました。

ぼくと妹は夏生まれです。だから一緒に誕生会をしていました。その年、おばあちゃんが

「近くで苦しんでいる人がいるのに、誕生会が出来るの？おばあちゃんだったら、人のためにお金を使うよ。」と言いました。

「何すりゃいいの？どうすりゃいいの？」とぼくはたずねました。

「おばあちゃんだったら寄付するよ。」と言いました。ぼくはなるほどと納得しました。ぼくは、銀行に行き大人になった気分で振込み用紙に書いていると、銀行のお姉さんが

「偉いね。立派だね。」とほめてくれました。

今朝、倉敷商業高校書道部の新聞記事を目にしました。中央に大きく書かれた繋という字がぼくの目にパッと入ってきました。「語り合おうあの日のことを。伝えようあの日の日のことを。」三年前のあの日の事がよみがえってきました。

ぼくが小学生になって、毎年の様に大きな災害があります。日本だけではなく、世界中でおきています。地球上のどこかで、誰かが災害で苦しんでいます。ぼくは、誕生会がなくても平気です。寄付を続ける事も平気です。しかし、ぼくが寄付をする事は世界のどこかで災害が起きているという事です。ぼくは、妹と一緒に誕生会が出来る事を待ち望んでいます。

豪雨の記憶 後世へ「繋」

倉敷商業高書道部　思い大書、真備で展示

西日本豪雨から3年を迎えたのに合わせ、倉敷商業高（倉敷市白楽町）書道部が豪雨への思いをしたためた作品が、被災から復旧したマービーふれあいセンター（同市真備町箭田）にお目見えした。8月初旬からは、同市阿知のJR倉敷駅前地下道アートギャラリーに展示する。23日まで展示されている。（吉川瑠美）

作品は縦2㍍、横7㍍。豪雨の記憶を風化させず受け継ごうという思いを込め「繋」という字を中央に大書。周囲には「語り合おうあの日のことを」「心と心を繋ぎ　故郷への想い　私たちが受け継いでいく」といった言葉を力強く記している。文言は3年生16人で話し合って決め、手分けして仕上げたという。

同部は豪雨直後から、被災者や地域に向けた激励文を避難所などに展示。その後も毎年、復興への思いを作品にして公開している。部長の3年松野愛海さん（18）は「豪雨のことを後世に伝えたいという気持ちで書いた。目にした人に前向きな気持ちになってもらえたら」と話している。

倉敷商業高の書道部員が西日本豪雨への思いを大書した作品

2021年7月13日付　山陽新聞

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。